

満蒙開拓団の後日譚

艱難汝を玉にす―前原英彦氏

この前の大戦末期、京都市中を行進する一団をみて、人々は、あれは何だ？と目を凝らした。

戦時下だから、兵隊が肩に銃をかついで行進するのは珍しくとも何ともなかった。

が、銃ではなく鋤をかついで行進していたのでみな不審に思った。

満蒙（満州・蒙古、現中国東北部）開拓義勇軍の面々だった。

満蒙は日本の生命線といわれた。

新天地を拓くためと大勢の人がソ満国境地帯へ満蒙開拓義勇団として赴いた。

ところが治安が悪く匪賊（盗人集団）が横行したため、開拓に従事する一方、匪賊の襲撃に備えるため別に満蒙開拓義勇軍なるものを募り現地へ派遣されたのである。

行列の中に前原関三郎もいた。

長男、英彦は当時在満国民学校（現小学校）の生徒だった。戦局日に日に不利になり、彼らは任地で生命の危険に何度もさらされた。

昭和二十年八月十五日、終戦。日本軍は武装解除され、満蒙は中国八路軍の制圧下におかれた。

国境を越えてロシア軍も侵攻し、両者によって日本女子は年齢に関係なく陵辱された。

中学生以上の男子は苦役に使われるためシベリアへ引っ張っていかれた。

人民裁判という名で無辜の日本人が何十人、何百人と銃殺刑に処された。

前原英彦は戦争に負けるということはこういうことかとその無残な光景を胸に刻みこんだ。

故郷・京都へ引き揚げてきた。

彼らはひとまず戦災引揚者寮「高野川寮」に身を寄せた。昭和二十二年六月、昭和天皇は関西地方巡幸されたが「高野川寮」に立ち寄られ、

「開拓者の諸氏は満州では随分苦勞したそうだが、辛かったろうね、引き揚げてまた苦しいだろうが、どうかつとめて明るい気持ちになって一日も早く起ち上がってもらいたい」と言葉をかけられた。

前原関三郎は英彦を呼び、

「天皇陛下からこのような有り難いお言葉を賜った」

と天皇のお言葉を伝え、

「天皇陛下のお心を安んじるために私達は何としても立派に生き抜かねばならない」

と懇々とさとした。

京都の北部に誰も住む人のいない原谷というところがあった。

そこを開拓しないかという募集があり前原関三郎は応募、選に入り昭和二十三年十月に京都府原谷開拓地入植第一号として一家で移り住んだ。

ここで原谷の歴史を略述する。

平安時代の末期、平家の落武者がこの地に居を構えたのが、人が住んだはじめと文献にある。

ところが一〇九九年の近畿大地震で人は絶えまた無住の地とかした。

その後また人が住むようになったが、ほぼ三百年毎に地すべりなどの天災に見舞われ、人が絶えるという惨事を繰り返した。

京都の人々は原谷を蓮華谷火葬場（明治三十七年十月～昭和五十六年三月末）の更に山奥にある場所と認識している。

昭和二十一年、農地法改正により、不在地主の農地を国が強制買収し、京都府原谷開拓地としたのである。

十家族が入植したが翌日、二家族が姿を消した。ここでは住めないと諦めたのである。

原谷の気象条件はあまりに厳しい。

標高、最高 二八〇メートル

最低 一六〇メートル

年間雨量 五四三、四ミリメートル

最低気温 マイナス十七度C

最高積雪 九〇センチ

電気も水道も道路もなかった。

入植の条件は七年間の開墾が義務づけられ十年のち検査に

合格すれば自分のものになるというものだった。

まず井戸掘りからはじめねばならなかったが、機械も道具もないから手で掘らねばならなかった。

土地は極端にやせていて、種をまいてもそれより大きい実にはならなかった。

家畜の糞で土地を肥やすために、豚、鶏、牛などを飼うことにした。

前原英彦は山城高校へ通うようになった。

山城高校へは峠を越して通った。

原谷に電灯がついたのは昭和二十五年十二月二十一日である。それまではうす暗いランプの下で本を読まねばならなかった。もし電灯がついていたら、京大か東大へ行っていたと思うと前原英彦は往事を振り返り冗談をいう。

父は歳に加え若い頃の無理が重なり一家の責任は英彦の双肩にかかった。

家畜の餌にするため、学校からの帰り、豆腐のおから、ふすま（穀粉・ひいた小麦の皮のくず）をもらいに廻った。

自分の体以上の大きい荷物を背負って急な坂を行く彼を見て原谷の入口、氷室の人々は「よう頑張る若者や」と感心した。

山城高校の同級生は彼がそのような苦勞をしていたことを知らない。

苦しいこと辛いことを人にさとらせないのが彼の美学だった。

ふすまだが、ふるいでこして、たべられるところを土の釜でむしてパンにし自分達がたべた。

「牛の餌のピンはねをしていた」

と前原は笑う。

開拓民の苦労はみのり、乳牛五十五頭、鶏三八〇〇羽を数えるまでになった。

原谷は今では住宅地になり家・マンションの戸数は二〇〇〇戸を越す。

逆に耕地は四十五ヘクタールから二ヘクタールに減った。

近くの金閣小学校の生徒の六十パーセントは原谷から通っている。

前原英彦は体も強いが運動神経抜群でスケート選手として国体に三回、役員としては実に四十四回参加している。

現在ジムも経営している。

昭和九年生まれだから七十歳を越えているが誰も彼の実年齢を当てる者はいない。

立派な面魂である。

彼と話していると艱難汝を玉にするという古い諺を思い出す。